

# 廓そだち

泉鏡太郎

青空文庫



ふる古くから、人も知つた有名な引手茶屋。それが去年の吉原の火事で焼けて、假宅で營業をして居たが、續けて營業をするのには、建て復しをしなくてはならぬ。

金主を目付けたが、引手茶屋は、見込がないと云ふので、資本を下さない。

殊に、その引手茶屋には、丁度妙齡になる娘が一人あつて、それがその吉原に居るといふ事を、兼々非常に嫌つて居る。娘は町へ出度いと言ふ。

女房の料簡ぢやあ、廓外へ出て——それこそ新橋なぞは、近來吉原の者も大勢行つて居るから——彼處等へ行つて待合でもすれば、一番間違は無いと思つたのだが、此議は又その娘が大反對で、待合なんといふ家業は、厭だといふ殊勝な思慮。

何をしよう、彼をしようと言ふのが、金主、誰彼の發案で、鳥屋をする事になつた。

而して、まあ或る處へ、然るべき家を借り込むで、庭には燈籠なり、手水鉢も、一寸したものがあるといふ、一寸氣取つた鳥屋といふ事に話が定つた。

その準備に就いても取々奇な事があるが、それはまあ、お預り申すとして、帳場へ据ゑて算盤を置く、乃至帳面でもつけようといふ、娘はこれを（お帳場へ）と言つて居るが、要するに卓子だ。それを買ひ込む邊りから、追々珍談は始まるのだが……

先づ其のお帳場なるものが、直き近所には、四圓五十錢だと、新しいのを賣つて居る。けれども、創業の際ではあるし、成るだけ金を使はないで、吉原に居た時なんぞと異つて、總てに經濟にしてやらなくちや可かんと云ふので、それから其の女房に、娘がついて、其處等をその、ブラ／＼と、見て歩いたものである。

茲に件の娘たるや、今もお話した通り、吉原に居る事を恥とし、待合を出す事を厭だと云つた心、懸なんだから、まあ傍から勧めても、結綿なんぞに結はうよりは、悪くすると廂髪にでもしようといふ——

閑話休題、母子は其處等を見て歩くと、今言つた、其のお帳場が、橋向うの横町に一個あつた。無論古道具屋なんです。

値を聞くと三圓九十錢で、まあ、それは先のよりは安い。が、此奴を行きなり女房は、十錢値切つて、三圓八十錢にお負けなさいと言つたんです。

するとね、これから滑稽こっけいがあるんだが……その女房かみさんの、これを語る時に曰いはくさ。

「道具屋だうぐやの女房かみさんは、十銭じっせん値切ねぎつたのを癩しやくに觸さわらせたのに違ちがひない。」

本人ほんにんは、引手茶屋ひきてぢややで、勘かん定ぢやうを値切ねぎられた時ときと同じに、是これは先方むかう（道具屋だうぐやの女房かみさん）も感情かんじやうを害がいしたものと思おもつたらしい。

因そこで、感情かんじやうを害がいしてると、此方こつちでは思おもつてる前方せんぱうが、件くだんの所謂いはゆるお帳場ちやうばなるもの……「貴女あなた、これは持もつて行いかれますか。」と言いつた。

然さうすると此方こつちは引手茶屋ひきてぢややの女房かみさん、先方むかうも癩しやくに觸さわらせたから、「持もてますか。」と言いつたんだらう。持もてますかと言いつたものを、持もたれないと云いふ法はふはない。「あゝ持もてますとも」と言いつて、受取うけとつて、それを突いき然なり、うむと、女房かみさんは背負しよつたものです。

背負しよふと云いふと、ひよろ／＼、ひよろ／＼。……一ひと足歩あしき出すと又またひよろ／＼。……女房かみさんは、弱よわつちやつた。可恐おそろしく重おもいんです。が、持もたれないといふのは悔くやしいてんで、それに押おされるやうにして、又またひよろ／＼。

二ふた歩三歩あしひよろついでると思おもふと、突いき然なり、「何なにをするんだ。」といふ者ものがある。

本人ほんにんは目めが眩くらんで居ゐるから、何なにが何どうしたかは分わからない。が、「何なにをするんだ。」と言いはれたから、無む論打ぶつかつたに違ちがひない、と思おもつたんです。で、「眞平御免まつびらごめんなさい。」

と言ふと、又ひよろ／＼とそれを背負つて歩く。然うすると、その背後で、娘は、クツクツクツ笑ふ。と、背負つてる人は、「何だね、お前、笑ひ事ぢやないやね。」と言ひながら又ひよろ／＼。

偕て、然うなると、この教育のある娘が、何しろ恰好が悪い、第一又持ちやうが悪い、前へまはして膝へ取つて持ち直せといふ。

それから娘が、手傳つて、女房は、それをその、胸の處へ、兩手で抱いた。

抱くと、今度は、足が突張つて動かない。前へ、丁度膝の處へ重しが掛かる。が、それでも腰を据ゑて、ギツクリ／＼一歩二歩づゝは歩く。

今度は目は眩まない。背後の方も見えるから、振返つて背後を見ると、娘は何故か、途中へ踞んでて動かない。而して横腹を抱へながら、もう止しておくれ／＼と言つて居る。無論可笑くて立つ事も出来ないのだ。

それが、非常に人の雑沓する、江戸の十字街、電車の交叉點もあるし、大混雑の中で其の有様なんです。恐らく妙齡の娘が横腹を抱へながら歩いたのも多度はあるまいし、亦お帳場を持つて歩いた女房も澤山はあるまい。何うしても其の光景が、吉原の大門の中で演る仕事なんです。

往來を行交ふもの、これを見て噴出さざるなし。而して、その事を、その女房が語る時に又曰く、

「交番の巡查さんが、クツクツ言つて笑つて居たつけね。」

すると傍から、又その光景を見て居た娘の云ふのには、「その巡查さんがね、洋刀を、カチャ／＼カチャ／＼揺ぶつて笑つて居た。」と附け足します。

で、客が問うて曰、

「それを家まで持つて來たの、」

女房が答へて、

「串戯言つちや可けません。あれを持つて來ようものなら、河へ落つこつて了つたんです。」と、無論高い俵代を拂つて、俵で家まで持つて來たものです。

今度は買物に出る時は、それに鑑みて、途中からでは足許を見られるといふので、宿車に乗つて家を飛び出した。

その時の買物が笊一つ。而して「三十五錢俵賃を取られたね。」と、女房が言ふと、又娘が傍に居て、「違ふよ、五十錢だよ。」と言ふ。

それから又別の時、手水鉢の傍へ置く、手拭入れを買ひに行つて、それを又十錢

値切つたといふ話がありますが、それはまあ節略して——何でも値切るのは十錢づゝ、  
 値切るものだと女房は思つて居る。

偕て、店をする、料理人も入つて、お客も一寸々ある事になる。

と、或お客が手を叩く。……まあ大いに勉強をして、娘が用を聞きに行つた。——

さうすると、そのお客が、「鍋下」を持つて来いと言つた。

「はい。」と言つて引下つたが分らない。女房に、「一寸鍋下を持って来い、と言つたが何だらう。」と。

茲に又きいちゃんと呼へて、もと、其處の内内藝妓をして居たのがある。今は堅氣で、手傳ひに来て居る。

と、其のきいちゃんの處へ来て、右の鍋下だが、「何だらう、きいちゃん知つてるかい。」と矢張り分らない女房が聞くと、これが又「知らない。」と言ふ。

「料理番に聞くのも悔しいし、何だらう……」と三人で考へた。考へた結果、まあ年長だけに女房が分別して、「多分釜敷の事だらう、丁度新しいのがあるから持つておいでよ。」と言つたんださうです。

然うすると、きいちゃん曰、「釜敷？ 何にするだらう？」



此處こゝがその、甚ひどく仲なかの町式ちやちきで面おも白しろいのは、女房かみさんが、「何なにかのお禁呪ましなひになるんだらう。」と言いつた。因そこで、その娘むすめが、恭うやくしくお盆ぼんに載のせて、その釜敷かましきを持もつて出でる。と、客きやくめうが妙かほな顔かほをして、これなを眺ながめて、察さつしたと見みえて噴ふきだ出して、「火ひの事ことだよ。」と言いふ。

でまあ恧かうい云ていふ體さい裁なんですがね。女中ぢよちゆうには總すべて怒鳴どならせない事ことにしてあるんださうだが、帳場ちやうばへ來きてお逃あつちへを通とほすのに、「ほんごぶになま二にイ」と通とほす。と此これを知る者もの一人ひとりもなし。で、誠まことに困こまつてる。

と、又また、或ある時ときその女中ぢよちゆうが、同おなじやうに、「れいしゆ。」と言いつた。又また分わからない。「お早はやく願ねがひます。」と又また女中ぢよちゆうが言いつた。

するとその娘むすめが、「きいちやん、れいしゆあるかい、れいしゆあるかい。」と聞きいた。もと藝妓げいしやのきいちやんが、もう一人ひとりの手傳てつだひに向むかつて、

「あ、早はやく八百屋やほやへおいで、」と言いつた。女中ぢよちゆうが、

「八百屋やほやへ行いつて何どうなさるんです。」

きいちやんが、

「だつてあるかないか知しらないが、八百屋やほやへ行いつたらばれいしゆがあるだらう。」

女中は驚いて、

「冷酒の事ですよ。」

冷酒と荔枝と間違へたんですが……そんなら始めから冷酒なら冷酒と言つてくれれば可いのにと家内中の者は皆言つて居る。又その女中が「けいらん五、」と或時言つた。而して、それは、その、きいちやんたるものが聞きつけて、例の式で、「そんなものはない。」と言つたが、これは教育のある娘が分つた。

「ね、きいちやん、けいらんツて玉子の事だね。」

すると又きいちやんの言つた言葉が面白い。

「そんな奴があるものか。」

「だつて玉子屋の看板には何と書いてある？」

「矢張りたまごこと書いてあるだらう。」と云ふんです。

……今の鍋下、おしたちを、むらさき、ほん五分に生二なぞと来て、しんこと聞くと悚然とする。三つ葉を入れないで葱をくれるといふ時にも女中は「みつなしの本五分ツ」といふ。何うも甚だ癩に障ると、家内中の連中がこぼすんです。

而して、おしたちならおしたち、葱なら葱、三つ葉なら三つ葉でよからうと言つて居る。

〇  
 「も一つ可笑な話がある。鳥屋のお客が歸る時に、娘が、「こんだいつ被入るの  
 と言ふと、女房が又うツかり、「お近い内——」と送り出す。」

明治四十五年五月



# 青空文庫情報

底本：「鏡花全集 卷二十七」岩波書店

1942（昭和17）年10月20日第1刷発行

1988（昭和63）年11月2日第3刷発行

※題名の下にあった年代の注を、最後に移しました。

※表題は底本では、「廓《くるわ》そだち」とルビがついています。

入力：門田裕志

校正：川山隆

2011年8月6日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 廓そだち

泉鏡太郎

2020年 7月18日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>